

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Department of Nephrology and Hypertension, Cleveland Clinic, Ohio:Believe in and reach beyond yourself;自分を信じて,自分を追い越せ
別タイトル	Department of Nephrology and Hypertension, Cleveland Clinic, Ohio: Believe in and reach beyond yourself
作成者(著者)	大橋, 靖
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(2). p.123 124.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	世界の研究室から
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.123
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD00672094

Department of Nephrology and Hypertension,
Cleveland Clinic, Ohio



Believe in and reach beyond yourself
自分を信じて、自分を追い越せ

大橋 靖

東邦大学医学部腎臓学講座 (大森)

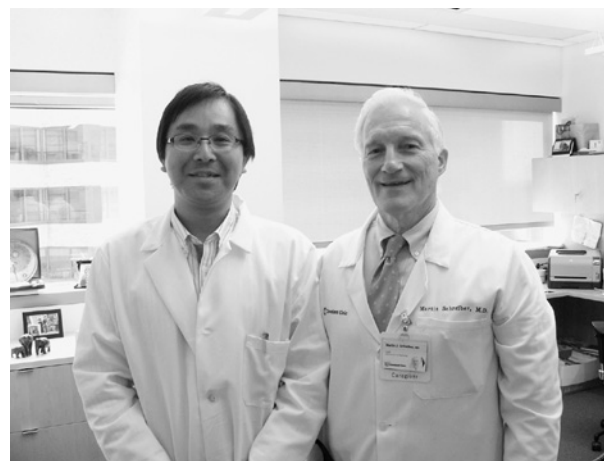
「東邦大学に天才はいない」これは僕の友人、田中仁英先生の言葉だ。東邦大学既卒生のだれかにできたことはきっと自分にもできるはずだ。留学の話が進んだのは医師14年目、専門医も取得し研修医に尊敬される程度には臨床をこなすことに慣れてきた頃だった。そんな僕に「前進」するように上司は留学を薦めてくれた。国際化の中、医師は高い研究マインドと英語力を期待されるようであるが、僕のような、日常たくさんのお年寄りを診ている医師にとって、研究や留学や英語力はあまり必要ない。どこに向かうことが「前進」なのかわからなかった。2011年4月9日、渡米12日前、陸前高田市の救護活動に手を挙げてみた。「留学経験のあるかっこいい先生」は僕に似合うような気がしない。でも、「進む勇気」は持っていたかった。

留学先で求められることは研究を進め、指導者の名前を corresponding author として論文を書くことであり、その対価として first author を了承される。つまり、研究留学を志す人は、基礎研究であれば実験のテクニックを、臨床研究であれば統計解析のテクニックを身につけておいたほうがいい。日本でできる苦労は日本でしておいたほうがいい。そのほうが留学先でより深い苦労ができる。もちろん英会話はできたほうがいい。思ったより生活していけるが、僕のように日々、劣等感を抱くことになる。僕は英語が苦手で、渡米前に「最初から英語を話せる日本人はいない」と解決にはならない励ましを受けた。僕にあるのは14年間の臨床経験と独学で身につけた統計解析のテクニックとやっと書いた1本の英語論文だけだった。

僕が留学した Cleveland Clinic は、2012年のアメリカ大統領選挙のオバマ大統領の演説の中で、「世界に誇る医療システム」として取り上げられた病院だ。その中で僕の所属

する Nephrology は今年、全米で No.1 に輝いた。Cleveland Clinic には日本の国立大学の先生もたくさん来ている。日本を飛び出してアメリカで臨床医として勝負している先生もいた。そのどれもが僕に劣等感を抱かせた。でも、悔しさを感じる自分には「伸びしろ」があるのかもしれない。与えられたテーマは腎移植ドナーにおける生活習慣病危険因子が、いかに腎臓に影響を及ぼすか観察することであった。Dr Schreiber 部長をはじめ、一緒に研究をしてくれた Dr Poggio と Dr Thomas はとても親切であった。しかし Dr Poggio の期待に応えるのは必ずしも容易ではなかった。データの取り方、解析の仕方、見せ方、クリアな「Question」とクリアな「Result」を要求された。

留学1年半目にあたる11月、米国腎臓学会 [American



僕を迎え入れてくれた Dr Schreiber 部長。忙しい方であったが、いつも気にかけてくれた。



サウスダコタ州バッドランズ国立公園，世界は広い。

Society of Nephrology (ASN) Kidney Week 2012, San Diego, CA, USA, 30th October–4th November, 2012] が開催され，そこで3つの演題を報告した。世界から約5000演題が申し込まれ，oral 採択率約8%という難関を2つクリアすることができた。仲間は「Big deal !」と称えてくれ

た。Poster 発表もマスコミから取材を受けた。でも，舞い上がった僕は質問にうまく答えられなかった。たぶん，記事にはならなかっただろう。先日 Dr Poggio が，「米国移植学会で報告したいのだが，よい題材はないか」と尋ねてきた。その分野で最前線にいる彼のために2つの抄録を書いた。そんな自分になれたことが素直にうれしい。

留学がすべての医師に必要なとは思わない。“科学する”ことは楽ではないし，自分の研究が未来を良くすると思えるほど傲慢でもない。でも，この留学で出会えた多くの才能と経験は貴重だった。上司は良いチャンスも，ときに良くないチャンスもくれる。でもチャンスをどうするかは自分次第だ。上司は結果までは保証しない。僕にとって留学はとても素晴らしいチャンスになった。僕は2年前の自分を追い越すことができたはずだ。

最後に，留学を快く許可していただいた腎臓学講座相川 厚教授ならびに温かく送り出してくれた腎センターの仲間，この留学中いろいろと助けてくれた医局秘書の平林さんに感謝したい。また，今回の留学に際し，助成してくれた本学，直接，労をとっていただいた腎臓学講座酒井 謙教授に心より感謝申し上げたい。